令和8年度　学校自己評価表

（　中間　）

学校名　三原市立中之町小学校

校番（　4　）

a 学校教育目標	学びあい、思いあい、高めあいのできる児童の育成 「三愛」	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命）友達と学びあい、思いあい、高まりあう児童の育成 【ビジョン】（自校の将来像）自分を愛し、人を愛し、未来を拓く力を育てる学校

評価計画						自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	9　月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価 イ	ロ	ハ	m コメント
確かな学力の向上	確かな学力を身に付けた児童の育成	◎主体的・対話的で深い学びの実現により確かな学力を育成する。	①算数科を中心とした授業づくり ・付けたい力とゴールの明確化 ・追究したくなる問題提示、児童主体の課題設定 ・数学的な見方、考え方を働かせ、「問い」を解決する授業づくり ・R80の活用（振り返りからの逆算式授業構想） ・リアルな学びを支えるICTの効果的活用 ②UDLに基づく授業改善 ・学習者視点での学びの障害を取り除く ・選択と自己決定の場の提供 ③生活科・総合的な学習の時間におけるPBLの推進 ・地域の教材化、地域人材の積極的活用	①単元末テスト「知識・技能」の平均正答率 ②単元末テスト「思考・判断・表現」の平均正答率 ③R80で振り返りをする際に、授業の中でのキーワードや接続詞を使って自分の考えを表現することができた児童の割合 ④「UDLの視点を取り入れて、授業改善を意識することができた」と回答している教師の割合 ⑤「数学的な見方、考え方を取り入れて、授業改善を意識することができた」と回答している教師の割合 ⑥「数学的な見方、考え方を意識して授業に取り組むことができている」と回答している児童の割合	① 1・2年85% 3年以上80% ② 1・2年75% 3年以上70% ③90% ④90% ⑤90% ⑥90%	① 1・2年 85.9% 3年以上 84.9% ② 1・2年 79.9% 3年以上 74.8% ③87.6% ④100% ⑤81.3% ⑥78.4%		① 1・2年 101% 3年以上 106% ② 1・2年 107% 3年以上 107% ③97% ④111% ⑤90.3% ⑥87.1%	①A ②A ③B ④A ⑤B ⑥B	①②どちらも目標を達成することができた。しかしながら、学年、学級によって大きな開きがあるという課題が残る。 ③目標を達成することができなかった。授業のキーワードを板書に残すことは、数学的な見方・考え方と絡めて研究授業や研修の中で職員で意識の共有をしてきたが、そのキーワードをどのように使って、何を述べればよいのか分からない児童がいる。 ④目標を達成することができた。しかしながら、研究授業や参観授業の時ほどには、日々の授業ではUDLの視点を意識できていないことが課題である。 ⑤⑥目標を達成することができなかった。教科書に明確な記述がない場合に教師が見方・考え方のカードを提示できなかったり、1年生や特別支援学級等においては、見方・考え方の概念が難しいという実態から、カードを使いきれなかったりしていることが課題である。	①②帯タイムの活動や、授業改善に関わる研修等を継続して行う。それに加え、管理職による授業観察と事後指導を行い、教師の指導力向上につなげる。また、学力的課題の大きい学年をペアにして、給食配膳の時間に高学年が低学年の学習をサポートする場を作ることで、両方の学力向上を図る。高学年については、月曜日の放課後に学力補充の時間を設け、全職員で少人数指導にあたることで、個の実態に応じた指導を行う。 ③R80から逆算した授業設計をすることで、板書の中に意識させたいキーワードを残し、授業のまとめ等に活用する。また、まとめの書きぶりを参考にR80で自分の考えを表現できるように、教師が型を示す等の工夫をすることで、児童がキーワードを使って振り返りができるようにする。 ④全単元で実践できたか自信がないという声もあったので、これまでの研究授業等で積み重ねてきた、UDLの具体を表にしたものを職員で共有することで、日々の実践につなげられるような研修を行う。 ⑤⑥単元のはじめや、初めて出てくる考え方については、教師主導で見方・考え方のカードを提示するが、少しずつ児童が前時や前単元と比較して見方・考え方を意識できる授業展開ができるよう、研究授業を通して実践を学べるようにする。また、学年で算数の単元計画を考える時間を確保することで、見方・考え方の活用を教師の中で意識化し、日々の授業で児童が見方・考え方を活用できるようにする。	○			・目標に対しての方策や達成度を掲げ数値化することで、評価の基準が分かりやすかった。 ・教える側も教わる側も共に成果を上げている。 ・先生方が研修等で指導力向上を図り、実践につなげていかれたことが、子供たちの授業に取り組む意識や学力向上に現れてきていると感じる。 ・学力については、反復・積み重ねが重要なので、現在の取組を自信をもって進めることで、成果は必ず付いてくると思うので心配していない。
豊かな心の育成	潤いと落ち着きのある自律した児童の育成	◎目標達成のため、自ら挑戦し、仲間と協働し粘り強くやりぬく力を育成する	①自己効力感・自己存在感を高める集団づくり ・一人一人の特性に応じた活躍の場の設定 ・頑張りを認める場の設定（成長ノート） ・相手を思いやる気持ちの醸成 ②「気持ちの良い学校」づくり ・自治的な児童会活動とリンクさせた規範意識と絆意識を醸成する場の設定 ・「あいさつ」と「掃除」による明るくきれいな学校づくり	①「これならできると自信をもっていえることがありますか」「あなたの話を聞いてくれる人がいますか」に肯定的回答をした児童の割合 ②「あいさつ」「掃除」の振り返りで肯定的評価をした児童・教師・保護者の割合	①85% ②90%	① 自信87.3% 話を聞く 95.1% ②あいさつ （校内） 児童91.9% 教師33.3% ③（地域） 児童87% 保護者55% ④掃除 （時間） 児童96.8% 教師88.9% （隅々まで） 児童95.5% 教師72.3%		① 自信102% 話を聞く 112% ②あいさつ （校内） 児童102% 教師39% ③（地域） 児童96% 保護者61% ④掃除 （時間） 児童107% 教師98% （隅々まで） 児童106% 教師80%	①A ② 児童A 教師C ③ 児童A 保護者C ④ （時間） 児童A 教師B （隅々まで） 児童A 教師B	①目標達成をすることができた。年度初めから実施している成長ノートを活用しながら、教師と児童の絆づくり、頑張りを認める場の設定ができつつある。安心感のある集団・人間関係が構築されてきている。 ②児童は、目標を達成することができたが、教師と保護者は目標を達成することができなかった。挨拶については、児童はできていると感じているものの、教師や保護者との捉え方のズレが生じている。 掃除については、時間いっぱい取り組んでいると肯定的にとらえた児童と教師の割合が高く、前年度よりも、掃除に取り組む姿勢が改善されている。しかし、隅々まで掃除をしているという項目では、児童と教師にズレがあった。	①2学期以降も、継続して成長ノートを使い、教師と児童の絆づくりから、児童同士の絆づくりができるよう、取り組んでいく。また、安心感のある集団・人間関係がさらに構築できるよう、ルールの徹底、特別活動などを活用した交流の場の設定を意図的に行っていきたい。 ②今後、「明るくきれいな学校づくり」のために、児童会活動や学級活動で、児童と保護者や教師のアンケート結果をもとに、分析を行う時間をとる。また児童会活動や委員会活動とも連携して、11月ごろには挨拶週間を作ったり、隅々まで掃除をするということはどういうことなのかを委員会朝会で周知し、共通理解を図っていく。児童が主体的・自治的に行動基準を高めていける工夫を取り入れる。	○			・成長ノートの活用により、自分が受け入れられているという安心感のある集団・人間関係ができている。 ・挨拶についての評価では、どんな挨拶を目標としているのか共通理解を図っていく必要がある。 ・挨拶は、声が小さくても、まずは肯定的に受け止めた上で、具体の姿を示していくとよい。「挨拶すること」が、人間相互のコミュニケーションの入口になることを伝えていく。 ・掃除の取組姿勢が改善されているとのことなので、引き続き指導をお願いしたい。 ・近年、登校班で次期リーダーが育ちにくくなっている。班長の働きで集団としてまとまり、それが挨拶にも表れていく。様々な場面で、リーダーシップを育てる取組が大切。
健やかな体の育成	生涯にわたり心身ともに健康で安全な活力ある生活を送るための基礎的実践力の育成	○自分の健康に関心を持ち、健康課題を自ら解決していこうとする態度を育成する	①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体力テストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②感謝して給食を食べようとしている児童の割合	①90% ②100%	①91.8% ②95.9%		①102% ②95.9%	①A ②B	①目標を達成することができた。運動やスポーツが好きな児童の割合は多く、休憩時間に意欲的に外遊びする児童が多く見られる。アクティブチャイルドプログラムを取り入れた授業改善により、苦手意識が低くなったことが考えられる。また、毎週水曜日のロング昼休憩や児童会主催のみんな遊び（ドッジボール）を実施することができ、体を動かすことの楽しさを味わう機会を作ることができた。今後は、体力運動能力向上に向けて取り組みが必要である。 ②目標を4.1%達成することができなかった。ほとんどの児童が感謝して給食を食べようとすることはできているが、苦手な献立では感謝して食べようとすることができていない児童がいる。	①授業改善について職員研修を定期的に実施し、体育科の授業をはじめ、子供たちの運動場面に還元していく。楽しく体を動かすとともに運動量も確保することで、体力運動能力向上が図れるようにする。また、陸上連盟の指導員を招聘し、陸上教室（4～6年）を10月に実施予定である。今年度も1月にマラソン大会を予定しており、児童が自分の目標に向かって、距離を決めることで、意欲と体力を高めさせていきたい。 ②食育年間指導計画に沿って、各教科と関連させて食育を推進していく。さらに、毎月1回配信している保健だよりや給食だよりを学級指導に活用し、季節の食べ物や食文化について知る機会を設定する。また、引き続き、栄養教諭と連携を図り、毎月19日の食育の日の全校指導を実施する。給食指導では、食べる前に食べきれる量に調節を行い、意欲的に食べることができるようにする。	○			・授業の工夫や全校での取組により、児童の意欲が高まっている。
信頼される学校	保護者・地域とともに歩む学校の推進	○コミュニティ・スクールを推進する ○教職員が健康でやりがいをもって勤務できる環境づくり	①目指す子ども像の共有 ・保護者、地域、関係機関との連携、積極的な情報公開 ②積極的な働き方改革への意識の向上 ・定時退校日の実施（毎週水曜日）	①「学校の様子がよくわかる」と肯定的回答をした保護者の割合 ②時間外勤務45時間以下の月が6ヶ月以上の教職員の割合	①85% ②100%	①68% ②92%		①80% ②92%	①B ②B	①情報公開については、目標を達成することができていない。すぐーるや便りで行事の様子はよくわかるが、個々の児童の様子があまりわからないという意見をいただいた。また、すぐーるで行事のリマインド通知があることがあることがありがたいという意見もあった。 ②4～8月の時間外在校等時間は、全職員の平均で28時間、個々の月平均で45時間超が1名であった。45時間を超えた月が半分以下の職員は25名中23名で、92%であった。昨年度同時期と全職員の平均の28時間は変わっていないが、45時間を超えた月が半数以下の職員の割合は昨年度の87.5%より向上した。	①情報公開に係っては、行事の報告だけではなく、学級の様子や個々の児童の様子がより伝わり、家庭と連携した児童育成ができるように改善していく。 ②引き続き校務のDX化、デジタル教科書の効果的な活用、学年での自作教材（プリント）の共用、各部内での業務のシェアリングなどで、業務改善に努めていく。	○			・学校と保護者・地域のコミュニケーションが広がりつつある。 ・CS活動も増えて軌道に乗り、体験学習を通して、子供たちの成長や学びに活きていると感じる。 ・コミュニティスクールでは、子どもの親である保護者の理解や協力体制が不可欠。すぐーるを活用して、保護者との連携の構築をお願いしたい。各保護者の得意とされる分野でコミュニティスクール運営をお手伝いしていただけるよう、PTAとして発信できたらと考えている。

本年度の重点目標については◎印で示す。

【j:自己評価　評価】
A:100≦（目標達成）　B:80≦（ほぼ達成）＜100
C:60≦（もう少し）＜80　D:（できていない）＜60

【l:学校関係者評価　評価】
イ:自己評価は適正である。 ロ:自己評価は適正でない。
ハ:分からない。